キャリア教育の手法としての個別学習課題

平　尾　元　彦

要旨

キャリア教育科目を効果的に運用するための方法論，とりわけ大教室での授業について山口大学の取り組みをもとに議論する。学生一人一人が自分のキャリアを考え実践する力を身に付けることはキャリア教育の目標とするところであるが，大教室の授業では困難な面もある。ここでは講義で学ぶ全体学習と個別学習を組み合わせた授業を提案し，個別学習のためのレポート課題に関して，受講生へのアンケート調査によって評価した。学生はおおむね課題の目標を達成しており，就職活動への効果も見られる。個別学習課題は一人一人のキャリア意識を高める上で有効であったと考えられる。情報収集に関する課題のより詳細な説明が必要なこと，講義との連動や表現力の強化の明確な位置づけなど，より効果的な課題設計のためのいくつかの改善点が示される。

キーワード

キャリア教育，個別学習課題，キャリアインタビュー，キャリアモデル

1．はじめに

学校教育の各段階におけるキャリア教育が注目されるなか，高等教育機関，とりわけ大学においてキャリア教育科目を開設し，カリキュラムに位置付けるところが増えている。このキャリア教育で目指すべきは個々の学生の適切な職業感の育成であり，自分のキャリアは自分で考え実践するための“力”をつけることであろう。たとえ教育目標はひとつであっても，当然ながら学生それぞれの描く道は異なり，個々の学生が学ぶべきこと，そして，そこから導かれる道筋は，学生の数だけ存在する。キャリア教育では，多様で多彩な学生一人一人のキャリアの力を向上させる教育が求められるのは言うまでもない。

大学の授業としてのキャリア教育を考えるならば，十数人のクラスでの演習的なやり方もあれば，数百人を相手にした大教室の講義もありうる。いずれにしても受講生すべてが自分自身の問題としてキャリアを深く考えて欲しいというのは担当者の共通する気持ちであり，目指すべき方向であろう。このとき，少人数のクラスであれば講師は個々の学生と向き合い学生とともに考えることも可能であるが，大教室の場合はそうもいかない。しかし現実には，全学的に求められる教育分野であることから受講者数も多く，大教室で実施する大学は多い。一方向的になりがちな大教室の授業においても個々の学生の力をつける教授法が求められることになるが，これはキャリア教育担当者の頭を悩ませる問題でもある。

本論文は，キャリア教育科目の実践を評価するもので，とりわけ大教室の問題に焦点を当てる。山口大学３年生を対象とする授業において，学生たちが取り組んだ個別学習のための課題レポートのパッケージを検討し，手

法改善への提案を行いたい。

２．キャリア教育科目の課題と山口大学の取り組み

２－１　山口大学のキャリア教育

山口大学では2000年より共通教育にキャリア関連授業を設け，キャリア教育に力をいれてきた。2005年度は，低学年向けの主題別科目「社会と組織：キャリアデザイン」（後期開講），高学年向けの総合科目「就職」（前期・後期開講）と総合科目「キャリア形成とコミュニケーション」を開講してきたが，本論で議論するキャリア教育の手法は，前期に２コマ開講した総合科目「就職」において実践されたものである。

2005年前期の授業概要と日程は以下のとおりである。

総合科目「就職」2005年度前期

■　授業の概要

働くための基礎知識として，経済・社会，そして自己理解のための理論および現実を学ぶことで，実際の就職活動に役立つ知識と方法論の習得をめざす。授業は講義形式で行うが，時間内での演習および宿題レポートを多数とりいれた実践的な講義をめざしている。学んだことは自分の就職活動にいかしてほしい。なお，本講義は山口県若者就職支援センターの協力により実施する。

■　授業の目標

就職活動の前に知っておくべき知識を習得するとともに，職業意識を高め，就職活動への意欲を増すことを目標とする。

■　成績評価

毎回提出を求めるミニレポート（「本日の講義で学んだこと」ほかを記述），および，課題レポート（宿題）にて評価する。課題レポートは第１回目を除きワープロで作成のこと（Ａ４紙１枚）。レポートは期限内に提出するとともに，最終提出日にすべてまとめて再提出すること。

■　講義日程（火曜日開講分）

１．４月12日（火）　講義概要と受講希望調査
２．４月19日（火）　就職活動の概要　→　課題①：就活 Information
３．４月26日（火）　就職活動と日本経済の基礎知識　→　課題②：キャリアインタビュー
４．５月10日（火）　就職活動と自己分析の基礎知識　→　課題③：キャリアシート
５．５月17日（火）　インターネット時代の個人情報保護と情報セキュリティ
６．５月24日（火）　就職活動と会社の基礎知識　→　課題④：キャリアモデル
７．５月31日（火）　就職活動と公務の基礎知識
８．６月７日（火）　業界研究・企業研究の基礎知識　→　課題⑤：企業研究きらり発見
９．６月14日（火）　インターンシップと仕事研究
10．６月21日（火）　就職活動と職業生活の基礎知識
11．６月28日（火）　就職活動の実際　→　課題⑥：就活インタビュー
12．７月５日（火）　就職活動と働き方の基礎知識
13．７月12日（火）　就職活動と採用の基礎知識　→　課題⑦：キャリア宣言
14．７月19日（火）　就職活動とコミュニケーションの基礎知識
15．７月26日（火）　まとめ　＜レポート最終提出＞

注）ここに掲載するのは火曜日の講義実績である。水曜日も同じ内容で実施した。

この授業は「就職活動の前に知っておくべき知識を身につける」をコンセプトとする高学年対象の共通教育科目で，全体をコーディネートする役割を山口大学学生支援センターの専任教員が担当し，山口大学の教員４名，そして，山口県若者就職支援センター（ジョブカフェ山口）のキャリアカウンセラー４名で実施した。授業のコーディネーターは，単に司会進行をするだけでなく，全体計画の立案や資料作成，学生の理解度の把握や個別学習課題の説明，提出されたレポートへのコメント，質問への回答，さらに授業外での就職相談への対応など様々な役割を演じてきた。基本的な授業進行は，コーディネーターによる前回授業の振り返りの後に，当日の担当講師によるテーマ講義が行われ，最後にコーディネーターによる課題説明やクイズの回答などが行われる。複数の教員によるチームプレーで全体が構成される授業である。

この授業は「就職」という名前であるが，就職活動というよりは，就職した後の働く力をつけることを目的としている。毎回のテーマに関する講義で基本的な知識を得ることはもちろんであるが，その背後にある理論や考え方を理解させることを心がけた。現象を知ることにとどまらず，なぜその現象が起こるのか考えることを重視している。会社や組織にかかわる内容が多く，社会科学を学ぶ学生には比較的なじみのある分野であるが，人文系や理系の学生たちははじめて耳にする用語も多い。このため内容はかなり平易にポイントを絞って講義を進めた。財務や組織の基礎知識のほか，多様な働き方の現状や給料・社会保障の実際，インターンシップや就職活動の情報提供もこの講義で行うとともに，途中で７回のレポートを課して成績評価の対象とした。自分の問題として考えるための個別学習課題を組み合わせて効果を上げるよう授業全体を構築している。

総合科目「就職」は，就職活動を控えた３年生を主対象とする授業であって，啓蒙的意味もあるため多くの学生が受講することが望ましいと考えた。前年は希望者が多くて受講制限をせざるを得なかったことから2005年度は２コマ開講に拡大し，両クラスで約500名となる大教室の授業として実施したものである。必修ではないが，高年次教養として開講されるいくつかの科目のなかから１科目以上を履修することが卒業要件となっている。学生が受講しやすい時間帯に開講すること，ならびに各学部の就職委員を通じてPRするなどして受講を促してきた。

２－２　大教室授業の問題点

本論は大教室型のキャリア教育手法を議論するものであるが，そもそもそこにどのような課題があるのだろうか，まずこの点を整理しておきたい[1)]。国立大学協会の「大学におけるキャリア教育のあり方」に関する報告書は，キャリア教育科目の目標として，①夢や目標を育む，②職業意識を育む，③自ら考え学ぶ力を育む，④自己表現力を育むの４つを例示し，大学生が自立した進路・職業選択ができるように，キャリア学習を通じて学生の「気づき」を促進することが重要であるとする。気づきの内容はもちろん個々人によって異なるが，一人一人が自分のキャリアは自分で考える必要性を自覚し，自ら動き出すことができるように，授業はその力を与えるものでなければならない。

報告書では，キャリア教育の授業形態を「Ａ．講義中心の授業：多様な講師」と「Ｂ．自己学習・相互啓発：講師との相互作用」の２つのタイプに分けて，特性と留意点を整理する。前者Ａタイプは複数の学内外講師によるオムニバススタイルが可能で，多様な生き方モデルが提示できて刺激となること，大きなクラスでも運用可能という特徴を有するが，一方で多様性に筋を通す役割が必要となること，単に感想文・レポート作成に終わってし

まい，気づきを促進することが難しいという問題も指摘される。他方，後者のＢタイプは一人の講師が変容の促進者となるため筋を通すことが容易になること，個人・グループ演習を導入しやすく，個人の気づきを促進しやすいという特徴はあるものの，相互作用を効果的に発揮するには「まとめ・添削」に相当負荷がかかること，講師の力量に依存する部分が大きいことなどの留意点が指摘される。

Ａタイプの代表例は，地元の経済界や同窓会の協力によって実施される職業講話のタイプである。経営者から若者へのメッセージが強烈に伝わるなど刺激を与えることが可能な反面，話を聞いただけで終わってしまう傾向が懸念され，授業を通じて自分の問題としてキャリアを考えることができるかどうかは大きな問題である。さらに，外部からお招きするからには多くの受講生に聞かせたいとの大学側の想いも発生することから，大教室を志向する面もあるだろう。このため気づきの確認やフィードバックがより困難になるという面もある。また，一人の講師がずっとかかわっているわけではないこと，受講者数が多いことから個々の学生とのかかわりが薄くならざるを得ないということもあり，このタイプの課題と言えるだろう。

個々人の気づきの促進を重視するという観点からは，少人数クラスが効果的ということだろうが，一学年数千人の学生を擁する大学においては数百のコマが必要となって現実的ではない。コストの問題もあるが，有効なキャリア講師を学内外から相当数獲得しなければならないことは，質の確保という困難な問題を発生させる。また，複数の講師でクラスを分担する場合は講師陣をまとめる役割が必要となり，マネージャーの力量が問われることも忘れてはならない。

２－３　大教室型キャリア教育の工夫

そもそもキャリア学習は専門分野を問わず必要なことであり，学部・学科によって求める内容が異なる部分はそれほど大きいものではない。複数の学部からなる規模の大きな大学においても，すべての学生に必要な教育科目として全学的観点から開講されるべきと考えられる。少なくとも希望する学生すべてが受講できる体制をとることが望まれるが，現実には資源制約がある。選択科目として実施可能な範囲の受講者数に限定してキャリア教育を行うと割り切るか，できるだけ多くの学生にキャリア教育を提供するために大教室を覚悟して，必修あるいは選択必修のような形態をとるか，各大学においても判断が分かれているのが現状だろう。

今回報告する山口大学の取り組みは，明らかに後者の大教室型を志向する[2)]。本論で検討するのは2005年前期の授業であるが，後期には別キャンパスの工学部向けを含めて２クラスを開講し，より多くの学生が受講できるような体制をとってきた。ただし，大教室の授業はどうしても一方向的にならざるを得ない面があって学生との相互作用の実現は難しく，この授業においても同様である。知識の伝達であればそれでかまわないのかもしれないが，キャリア教育はそうではない。学生一人一人の自立した職業選択の意識形成を支援するというキャリア教育の目標からすると，大教室の弊害を緩和する工夫が必要となる[3)]。

この問題に対して総合科目「就職」では，以下の３つの工夫を行った。

ひとつは，毎回の授業でミニレポートを課した。単なる感想で終わらないことを重視し，当日の講義で学んだことに加えて，毎回キャリアに関するテーマを授業時間内に記入し提出させるもので，出席管理にも活用している。少なくともこの授業の時間は自分の問題としてキャリアを考えようという趣旨である。コーディネーターは授業のはじめに毎回のテーマを説明すると同時に，前回のミニレ

ポート記載内容を全受講生に対してコメントし，フィードバックする。さらにこの用紙の裏には三択問題の簡単なクイズを10問ほど準備して，授業がはじまる前にチャレンジすることを促した。当日の講義に登場する重要用語の理解を深めるためのもので，自分が知らない・わからないことを明確にして学習に取り組む，参加意欲を増すためのものである。ちなみにクイズは授業の最後に自己採点するものの，点数は成績評価に無関係としている。

もうひとつは電子メールの活用である。講義の疑問点や就職活動に関する質問をミニレポートに書かせるとともに，回答が必要な者にはメールアドレスを記載させて，電子メールで個別に回答することにした。毎回提出されるミニレポートは500枚ほどにのぼるため，量的問題から毎週の実施はできなかったが，最初と最後，そして中間段階に実施することで個人的な質問にも回答できるよう工夫した。大教室の授業では個々に質問を受けることが難しい。大勢の前で手を挙げにくいということもあるだろうが，授業終了時に学生が質問に来ても時間の関係で２～３名にしか対応できない。一人一人に向き合うという観点から電子メールを併用して個別に回答したことは，疑問や不安を解消して前に進むという面で大きな効果があったものと考えられる。

そして，もうひとつの工夫は課題レポートであり，この授業では複数の課題の組み合わせとして提供した。次に課題の内容およびその評価を見ていきたい。

３．個別学習のための課題設計

総合科目「就職」は，講義での全体学習と課題レポートによる個別学習との組み合わせで教育目標を達成するよう授業を構成した。つまり基本的な知識を得ること，考え方を理解することを全体学習として講義で学ぶとともに，自分の問題としての個別学習は，課題レポートで実施するよう組み合わせたものである。学期中ほぼ二週に一回のペースで７つの課題が出題された。まず，これら課題パッケージの設計方針ならびに各々の課題の目指すところについて整理しておきたい。

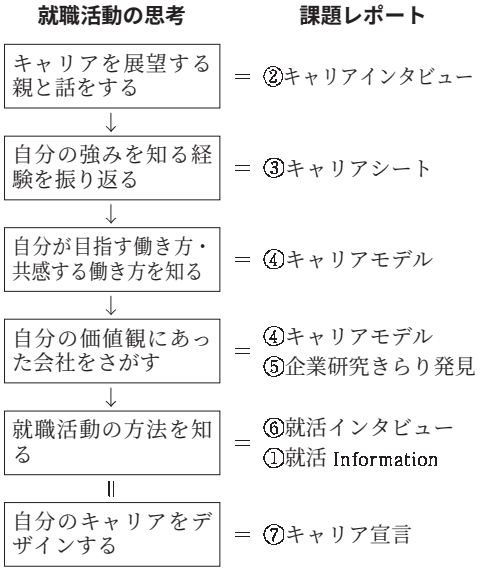
課題の内容と目標は表１に示すとおりである。各レポートとも書式は自由であるが，Ａ４紙１枚で表現することを求めた（裏面は使用可）。

表１　課題レポートの内容と目標

課題テーマ	課題の内容	課題の目標
① 就活 Information	４年生・修士２年生の就職活動体験報告集を読んで問題に答える	先輩の体験を学び，就職活動は人それぞれ違うことを理解する
② キャリアインタビュー	仕事経験や職業選択理由についてインタビューし，「私」へのアドバイスをもらう	身近な人生の先輩の歩んできた道を学ぶことで，自分自身のキャリアを考える
③ キャリアシート	これまで経験した事実と達成事項５例以上あげ，自分らしさを記述する	自分の強みをみつけ，自身を表現するための材料を得る手法を身につける
④ キャリアモデル	書籍・ホームページ等を活用して，働き方が共感できる人物をさがして記述する	具体的人物を通じて自分が共感する働き方を発見し，理解する
⑤ 企業研究きらり発見	ホームページ等を活用して，自分の価値観にあった会社の良い部分を見つけ記述する	仕事に対する自分の価値観を見つけ，その観点から会社をさがす手法を習得する
⑥ 就活インタビュー	就職活動を終えた先輩に，活動途中での転機や選択理由をインタビューする	先輩の活動を通じて就活の個別具体論を学ぶとともに，質問力を身につける
⑦ キャリア宣言	これまで課題で考えた自分の強みや価値観を総動員し，自分のキャリアを記述する	将来の自分の職業的希望を明確にし，その表現力をつける

実は，この課題は就職活動の思考プロセスに対応している（図２）。大学生が就職活動をするにあたって自分自身のキャリアを展望する必要があるが，いきなりそれは難しい。まず人生の先輩がどのような道を歩み，転機でどのような選択をしてきたのか，その選択がどのような理由でなされてきたかを知ることは，自分のキャリアを考える上で有用と考えられる。また，就職活動にあたって親と話をすることを多くの識者は勧め，この有効性は平尾［2005a］においても実証されている。「大学を卒業したら就職をする」という意思決定の自覚を促す面でも重要であり，今後必要となる金銭的支援も含めて，就職活動前の親との対話は必要であろう。課題②はこれらを実践するものとして学期初めの４月に行った。

図２　就職活動の思考プロセスと課題レポート



次に，自分を知ること，とりわけ自分のこれまでの経験と達成事項に基づき自己を振り返ることは就職活動の初期段階で必須の作業である。また，将来へのビジョン，考え方を自分なりに整理しておくことも欠かせない。自分の過去と未来を語ることができるよう自己分析を進める必要があり，課題③④がここに対応する。

そして，自分なりの方向性がどのような仕事で，どの会社で実現しうるかというステップへと進んでいく。自分と会社・仕事への出会いである。業界研究・企業研究は実際の働く場面を知るという意味で重要ではあるが，「何を研究したらよいかわからない」というのは，就職活動初期段階の大学生の率直な気持ちであろう。一言で言えば自分にあった会社をさがすことになるが，これは自己分析との共同作業となる。課題④⑤がここに該当する。

もうひとつ，就職活動の方法を知らなければならない。どの書籍を活用すればよいか，面接対策をどうするのが有効かというテクニックの面もあるが，ここで重視したいのは意思決定のプロセスであり，納得のいく選択をどのようにつくりあげていくのかと言うところにある。課題①⑥はこの思考のトレーニングである。

就職活動ではこのような思考プロセスを経て自分なりの選択をするわけであるが，課題①～⑥はこの流れに対応する。そして最後の課題⑦キャリア宣言は，これらを総動員して自分のキャリアを展望するというものである。

７つの課題のうち，②～⑦は就職活動に必要な３つの力に対応している（表２）。「情報を制するものは就職活動を制する」と言われるほどに，就職活動においては情報を収集し，適切に判断する力は重要である。書籍・インターネットをはじめ，データベース等の情報ツールを駆使して有利に進める必要があり，課題④⑤にはこの力を向上させるという目的もある。授業では，参考文献やホームページを紹介するとともに，調べ方を説明し，情報力強化の必要性を強調した。また，就職活動では多くの人に出会い話をする。会社説明会や OBOG 訪問の場面で適切に質問ができるかは情報収集の面で，かつ，相手への印象形

成という意味でも重要な力と言える。課題②⑥は実際にインタビューを体験する課題で，話のポイントをつかんで深く広く聞いていく，かつ，聞いたことのポイントを文字で表現する力を向上させる目的もある。さらに就職活動では，自分を伝える力は重要であり，自分のことを深く考え，表現する力が求められる。課題③⑦の課題説明では，自分を伝えるための効果的表現方法を解説し，実践を促した。

表２　就職活動に必要な力と課題レポート

就職活動に必要な力	課題レポート
情報力 書籍・インターネットを活用し徹底的に調べる	④キャリアモデル ⑤企業研究きらり発見
質問力 インタビューをする	②キャリアインタビュー ⑥就活インタビュー
自己分析力・自己表現力 自分のことを深く考え表現する	③キャリアシート ⑦キャリア宣言

なお，すべての課題に言えることであるが，課題が「できない」ことは避けなければならない。すなわちこれは自分自身の問題としてキャリアを考えるための個別学習課題であり，考えることを放棄してしまっては学習が成り立たない。インタビュー課題における相手の範囲や情報収集課題における利用ツールの制限など，制約条件が厳しすぎるのは好ましいことではない。それぞれの課題の目標を達成しつつも「できる」課題設計を心がけた。

４．個別学習課題の内容と実施状況

総合科目「就職」で実施した７課題について，各課題の内容を詳述するとともに，いくつかの課題については学生たちがどのように取り組んだのかを整理しておきたい。

ところで，この課題レポートはおおむね二週間後に設定された期限に提出させるとともに，授業の最終日に再度まとめて提出させることとした。最終提出段階で書き直して提出することも可能である。このような方法をとったのは，自分が書いたレポートを改めて見直す機会をつくること，一冊にまとめて各自保管することで就職活動に役立てるためであり，採点を効率的に行うという講師の都合も含まれる。

課題の最終提出日2005年７月26日（火）・27日（水）には，この課題に関するアンケート調査を実施した。このとき学生の手もとには最終提出のレポート冊子があり，これまで自分が書いたレポートを見ながらの回答である。当日の出席者に調査票を配って趣旨を説明したうえで無記名で回答を求め，その日に回収した。有効回答は430人で，学部別の内訳は表３のとおりである。

以下では，各課題の内容ならびに実施状況を順に記述する。

表３　アンケート回答者の学部

学　部	回答数	構成比
人　文	45	10.5
教　育	13	3.0
経　済	204	47.4
理　学	104	24.2
農　学	63	14.7
合　計	430	100

４－１　就活 Information

“山大生が創る山大生のための就職活動応援 Magazine”をキャッチフレーズに学生が先輩の就職活動体験をインタビューしてまとめた冊子がある。課題レポートの第一番目はこの冊子「就活 Information」を読んで，Ａ４紙１枚両面の記述式問題に答えるというものである。基本的には読めばできる問題で，課題の狙いはこの冊子を読むところにある。ここで重要なことは，就職活動は人それぞれ違うこと，このことを理解して自分なりの就

職活動を考えるきっかけにすることである。人はそれぞれ選択する場面に直面し，そのときなんらかの理由をもって選択しているという事実を，身近な先輩の体験談を通じて学ぶことになる。

この冊子は大学生協が発行して無料で配布するものであるが，受講者用に確保・提供いただき，第２回目の講義で課題シートとともに配布した。当日の授業では，就職活動の実際を学ぶためのテキストとしても活用した。

図１　山口大学就活 Information

４－２　キャリアインタビュー

課題は「人生の先輩１名にキャリアインタビューをし，レポートせよ」というもので，身近な人生の先輩の歩んできた道を学び，自分自身のキャリアを考えるための参考にすることを目的とする。インタビューの相手は，父親・母親，祖父母，兄弟姉妹，親戚，知人など誰でもよいが，「就職活動を前にした時期という点から親にインタビューすることが望ましい」ことを口頭で補足をした。ただしなんらかの理由により親にインタビューできない学生もいるので，親に限定するわけではないこと，人選は評価の対象ではないとしている。

インタビューに必ず盛り込むべき内容として以下の①～④を，そして，⑤自分の感想を記載することを指示した。

① これまで取り組んできた仕事（キャリア）
② どうしてこの仕事を選んだのか
③ この仕事に必要な能力・仕事のやりがい
④ これから就職していく「私」へのアドバイス
⑤ 今回のインタビューを体験した（自分の）感想

キャリアインタビューに関しては前年も同様の課題を出しており，その評価は平尾［2005a］にて検討されている。ここで，昨年実施した前回調査と比較することで，前回の反省点がどのように活かされたのかを見ておきたい。インタビューの相手は，父親・母親あわせて76.5％で，前回（69.2％）に比べて親を選んだ割合は上昇した。前回調査のコメントで，「親の仕事は知っているので親には聞かない」というのがあったが，言うまでもなく，この課題は親の職業調べではない。今回は「就職活動を控えた今だからこそ親に話を聞くことは重要である」との説明を加えて意義を強調した。このこともあってか，インタビュー相手に親を選んだ比率は上昇している。親以外には，やはり年齢が近くて聞きやすいのだろうか，兄弟姉妹が7.9％と多く，これは前回と同様の傾向であった。親に限定しないという配慮は授業の課題として必要なことであるが，趣旨を理解して課題に取り組むことができるような課題の設計は重要である。

表４　キャリアインタビューの相手

	回答数
父　親	203（47.2）
母　親	126（29.3）
祖父母	2（ 0.5）
兄弟姉妹	34（ 7.9）
親　戚	15（ 3.5）
山口大学の教職員	5（ 1.2）
アルバイト関係者	13（ 3.0）
サークル関係者	7（ 1.6）
その他	22（ 5.1）
無回答	3（ 0.7）
合　　計	430（ 100）

注）（　）内は総数430に占める割合（％）

インタビューの方法について，前回の経験から電話や電子メールを活用する学生がいることはわかっていたので，今回は最初からそれを認めることを宣言し，ただし，一回のやりとりで終わるのではなく，何度もやりとりをしてより深く聞き出すよう注文をつけた。学生たちがとった方法をみると，直接対面インタビューが52.1%で約半数を占める。前回は47.3%だったのでやや上昇した。電話は31.2%，電子メールが12.1%で前回（それぞれ31.9%，11.6%）とほぼ同じ割合であった。比率的に大きく変動しているわけではないが，「昨年は親が書いたようなレポートがあった」ことなどを口頭で伝えたこともあって，親が送信したメールをそのまま貼り付けたと見られるレポートは今回はなかった。親元から離れている学生が多いこともあって，直接対面を基本とするものの電話・電子メール等の活用も認める配慮は必要と考える。このとき，その留意点を明確に課題に記しておくことが求められる。

表５　キャリアインタビューの方法

	回答数
直接対面	224（52.1）
電　話	134（31.2）
手紙・FAX	12（ 2.8）
電子メール	52（12.1）
その他	5（ 1.2）
無回答	3（ 0.7）
合　計	430（ 100）

注）（　）内は総数430に占める割合（%）

４－３　キャリアシート

自分のキャリアシートを記述する課題で，自分自身を表現するための材料を得る手法の獲得を目的とする。「自分を表現するネタとして，記載例に従い５本（以上）を記載せよ」との課題内容で，学業・サークル関連，社会活動・アルバイト関連等について，経験した事実と達成事項を短く記述することを求めた。特別な話でなくてかまわない，どんな小さなことでも自分らしさがあらわれる事実をみつけること。経験した事実が重要なのではなく，そこで身についた知識・能力，経験における実績・貢献に基づき自分を表現することが重要であるという説明をし，「常にプラス思考で！」という言葉を添えた。

４－４　キャリアモデル

ここでのキャリアモデルは，個人がキャリアを考え選択する際に，その方向性を示すようなモデル（ひながた，模範）となるものである。働く個人の姿がキャリアモデルそのものであり，自分にあった働き方をイメージするのに役立つ。自分自身のキャリアを考える前にキャリアモデルを見つけることは，自らの働き方をとらえる上で有効となるだろう。今回のレポートはキャリアモデルの発見によって，共感できる働き方を具体的人物を通じて理解することが目的であり，決してキャリアモデルを「決める」ものではない。この点を強調し，レポートにはキャリアモデルを通じて理解した“自分が共感する働き方”の明記を求めた。探し方には制約を設けなかったが，著名人のほうが情報がたくさんあってやりやすいことを補足し，キャリナビ・リクナビ等のホームページ，プロジェクトＸ等の書籍を紹介した。

レポートには，次の項目を盛り込むことを求めた。①モデルはどういう人か，②働き方の共感した部分は何か，③なぜそこに共感したのか，④どういう調べ方をしてみつけたのか，情報源を明記すること。以上である。

この課題についても前年の調査結果が平尾［2005b］にあるので，その比較で見ておきたい[4]。前回の課題に対する学生からの意見として，「共感という意味がわからなかった」があったので，この点については丁寧に解説した。また前回は「調べていない」とする学生が１割ほどいたので今回はネットや書

籍で自ら調べることが重要であるという点を強調した。以上の２点が前回の反省に基づく改善点である。

アンケート調査で最も活用した情報源を尋ねたところ，インターネットが68.6％で最多であった。具体的には講義で紹介したキャリナビ（24.7％），リクナビ（26.2％）を活用した学生が多い。インターネットで気軽に利用できることや，一人一頁でコンパクトにまとめられていること，検索機能がついて自由にさがすことができ，職業研究の幅が広がることなど，モデル探索に活用しやすい点が評価されたものとみられる。また，書籍の活用は14.9％であって必ずしも多くはなかった。本人の書いた本で調べた学生が多いが，なかには雑誌記事や新聞記事で書いた学生もいる。さらに，今回のレポートのために直接本人に取材した学生が5.1％いる。この方法を推奨したわけではないが身近にいる憧れの先輩モデルとして大学の先生を取材した学生などがここに含まれる。

このほか，前回の反省点でもある「これまでの自分の記憶で書いた（今回のレポートのために調べてない）」という学生は6.7％で，前回（12.8％）からは大きく低下した。情報力をつけるという課題の趣旨からすると，自分の持つ情報だけで書くのは望ましいとは言えない。この点は課題説明でとくに注意した点であるが，6.7％がまだここに分類されるところは問題であり，より明確な指示が必要と考えられる。

４－５　企業研究きらり発見

就職活動では，自分が将来とりくみたい仕事や情熱をそそぎたい仕事を思い描くこと，そして，この考えにもとづき，どの会社・組織で仕事に取り組むことが望ましいかを，自分のキャリア形成の観点からさぐっていくことになる。この課題は自分の価値観にあった企業を見つけるための手法の学習を目的とするもので，けっして自分の価値観をひとつに決める必要はないし，固定的に考える必要もない。例えば・・・との考えのもとで，自分の価値観にあった企業の“きらり”と輝く部

表６　キャリアモデル調査のための情報源

	回答数
これまでの自分の記憶で書いた（今回のために調べてない）	29（ 6.7）
今回のレポートのために直接本人に取材した	22（ 5.1）
書籍を活用して調べた（雑誌・新聞・パンフレットを含む）	64（14.9）
インターネットを活用して調べた	295（68.6）
その他	5（ 1.2）
無回答	15（ 3.5）
合　計	430（ 100）

書籍（雑誌・新聞・パンフレット含む）の情報源

	回答数
本人（あるいはその人を含むグループ）に焦点をあてて書いた本	25（5.8）
多くの人のことを書いた本のなかの一部	11（2.6）
雑誌記事	12（2.8）
新聞記事	5（1.2）
会社のパンフレット	5（1.2）
就職情報会社の冊子・パンフレット	2（0.5）
その他	4（0.9）

インターネットの情報源

	回答数
リクナビ	97（22.6）
毎日就職ナビ	8（ 1.9）
日経就職ナビ	10（ 2.3）
キャリナビ	106（24.7）
お仕事未来図鑑 JobShower	4（ 0.9）
会社のホームページ	33（ 7.7）
本人のホームページ	21（ 4.9）
その他	16（ 3.7）

注）（　）内は総数430に占める割合（％）

分を発見する作業を通じて企業研究を体験し，就職活動にいかしてほしいとするものである。

実際の就職活動では直接会社に出向き，出会って確認する行為は必須であるが，課題ではインターネット等によって入手可能な資料のみで発見することにした[5)]。会社のホームページによる情報収集はもちろん行うが，今回はそれ以外の情報源を重視してほしいとして，新聞記事データベース：日経テレコン21，国内雑誌論文データベース： Magazine PLUS など学内で利用できる情報源を説明した。ホームページや書籍からの情報を活用しながら，鋭い観察眼を持って徹底的に調べることを促した。レポートには，①会社名，②自分の価値観に則したこの会社の良いところ“きらり”，③情報源の明記を求めている。

アンケートでこの課題で利用した材料・道具を尋ねたところ（複数回答可），会社・組織のホームページを利用したという学生は84.4%，就職ナビの活用は36.3%であった。企業研究ではこのような会社提供情報を見るのは当然であり，さらに突っ込んで情報収集してほしいと考え，他の情報源の活用を促すためにデータベースの活用や書籍・雑誌記事の有効性なども説明した。あらゆる情報を駆使して調べるよう指示したものではあるが，実際には，他の情報源にアクセスしている学生が何人かはいるものの決して多くはなく，インターネットによる会社情報の活用にとどまった学生がほとんどであった。幅広く情報を集めようとする気持ちを有し，実践すること。このことが実現できるように課題の設計を工夫する必要があり，今後の課題と言えるだろう。

4－6　就活インタビュー

就職活動を体験した先輩に「就活インタビュー」を実施し，記述せよという課題である。就職活動の一般論は書籍やホームページなど詳しく紹介されているので，それはそれでしっかり学んでいくとして，ここでは就職活動を終えた先輩へのインタビューを通じて実際の活動を学ぶことを目的とする。その先輩の就職活動は自分自身にあてはまるものではないかもしれないが，そこから得られる具体的事実を自分自身の活動に活かしてほしいし，活かせるように聞き出してほしい。そのためにはインタビューの技法を習得することが必要であり，これは就職活動においても重要である。この課題は「質問力」を強化すること，「取材して書く」ことを通じた表現力アップも目的としている。

表7　企業研究きらり発見で利用した材料・道具

	利用率
会社・組織のホームページ	84.4
会社・組織のことが書かれた書籍・雑誌	14.7
会社・組織のことが書かれた新聞記事	6.5
会社・組織をテーマとした番組・映像	4.4
会社の人・在職経験者に直接話を聞いた	5.8
就職ナビの企業情報・仕事情報	36.3
図書館（大学および県立・市立等）	5.6
雑誌記事データベース Magazine Plus	3.0
日経テレコン21	4.9
日経テレコン21以外の新聞記事データベース	2.1

注）利用率は総数430に占める割合（%）
レポートの題材にはならなかったが使ったものを含む

質問の内容として以下の項目を盛り込むことを指示した。

① 就職活動の初期段階で何を考えてどう行動していたか
② 内定に到達するまでの考え方や行動の変化。とくに「転機」はなにか
③ どうしてその会社（仕事）にしたのか，決め手は何なのか
④ 苦労したこと，困難だったこと，つらかったこと → どう乗り越えたか
頑張ったこと，自分なりによかったこと → なぜそれができたのか
⑤ これから就職活動に取り組む後輩（私）へのアドバイス

この課題を実施するにあたっては，インタビューする先輩がいなくて課題ができないと

いう問題が懸念された。第11回目の授業「就職活動の実際」には就職活動を終えた４年生３名に来ていただき，当日の講師が代表インタビューをしたものを自分が質問したように書いてよいことにして，インタビューができないという問題を回避した。また，先輩との交流の場として学生が企画する「就職活動交流会」を活用してもよいし，この機会に先輩訪問するのもよしとした。

実際には，どのような先輩を見つけてくるのだろうか。アンケートによると授業を活用したのが22.3%で，８割近くは自分で先輩を見つけてきた。逆に言えば２割程度の学生は実際に自分でインタビューをしていないことになる。質問力をつけることがこの課題の目標でもあることを考えると，やはり直接相手に質問する場を持つことが望ましい。どうしても自分で相手をみつけることが困難な学生はおそらく存在すると考えられるため，その学生が質問する先輩を見つけることができるように，サポートする工夫も必要と考えられる。

４－７　キャリア宣言

これまでの課題レポートの総決算として，最後の課題は「私のキャリア宣言」を記述せよという課題とした。将来の自分の職業的希望を明確にすることで就職活動に役立てること，自分のキャリアを考え，それを表現する力を養うことを目的とするものである。

ここで記述する内容は，「将来の職業の希望とその説明」であり，単に○○に入社したい，○○になりたということではなく，仕事を通じて実現したいこと・貢献したいこと・能力を高めたいことを中心に記述する。採用側に提出する書類を想定して内容を考えることとした。これまでの課題ではＡ４紙１枚とする以外の表現方法は自由であったが，この課題に限っては文字数400字を基本として，長く書きたい人は800字も可能とした。就職活動で直面するエントリーシートでは文字数制限がある場合が多いので，文量を意識して表現することができるように課題を設計した。

表８　就活インタビューの相手

	回答数
総合科目「就職」の授業	96（22.3）
就職活動交流会	16（ 3.7）
ゼミ・研究室	30（ 7.0）
学部・学科	37（ 8.6）
部・サークル	123（28.6）
アルバイト	54（12.6）
同郷	36（ 8.4）
その他	33（ 7.7）
無回答	5（ 1.2）
合　計	430（100）

注）利用率は総数430に占める割合（%）

５．課題の評価

受講者へのアンケート調査にもとづいて，実際に課題レポートを体験した学生による評価を見てみたい。

５－１　全体評価

７つの課題レポートに関して，難易度，自己評価，効果についての評価を尋ねた。結果は表９に示すとおりである。各項目とも，肯定的回答と否定的回答に分けてその比率を示している。

このレポート課題は二週に一回のペースで出題されるもので，就職活動前の思考訓練の意味合いを持つ。したがって，あまりに実施が困難であっては困るし，難しいと感じたとしてもそのことによって自分自身の課題を認識するものでなければならない。実際に難易度の項目をみると，最初の課題の就活 Information を難しいとする回答は11.2%にすぎないが，キャリア宣言，企業研究きらり発見，キャリアシートを難しかったとする学生は半数以上存在する。相対的に難易度が低い

のはキャリアインタビュー・就活インタビューの両インタビュー課題である。課題達成への行動が明確であったこと，インタビューの方法など講義のなかで丁寧に説明したことが受け入れられたのではないかと考えられる。

次に，自己評価であるが，おおむね６～７割が目標を達成できたとし，できなかったと回答するのは10％程度である。難しいと感じながらも肯定的に評価する学生は多い。ひとつやや否定回答が多いのは企業研究きらり発見であった。この課題には自分の価値観を明確にすること，企業を研究することの二つの要素が含まれるが，とくに自分の職業への興味を仮と言えども明確にすることが，うまくできない学生が多かったようである。

最後に，就職活動に役立つかという効果に関する回答を見ると，こちらも６～７割が効果を感じたと回答する。なかでも就活インタビュー，キャリアシートの肯定回答率が高い。これらは就職活動で必要な手法そのものであり，理解しやすい面があるだろう。反対にキャリアモデルの肯定回答が59.5％で相対的に低く，否定回答は15.1％と他に比較して高い。共感する働き方を見つけることが就職にどう結びつくのかがピンとこなかった学生も多かったようである。この点については，より丁寧な説明が必要だろう。

このアンケートでは「この７つの課題レポートの効果を，あなた自身の就職活動に役立つとという観点から順位付けし，上位２位までの課題番号を記入してください」という質問で，課題間の相対比較を行った。読んで問題に答えるという課題の就活 Information を除けば，その評価はかなり分かれたと見てよいだろう。

このなかで最高の支持を集めたのは就活インタビューであった。後半の課題であるため印象深かったこともあるが，実際に先輩を訪ねて話をするという行動をともなう課題であり，就職活動の生の声を聞くよい機会となった。続いてキャリアシート，キャリア宣言をあげた学生が多い一方で，情報収集に関する課題であるキャリアモデル・企業研究きらり発見を役に立つとした回答者はやや少ないという結果が得られた。会社や仕事を調べる手法を身につけることは就職活動において重要である。ただし実際には調べる力がついたと実感するところまでは到達しておらず，この点は課題設計において見直すべき点であろう。

表９　課題レポートの難易度・自己評価・効果

	難易度			自己評価			効　果		
	肯定回答	中間回答	否定回答	肯定回答	中間回答	否定回答	肯定回答	中間回答	否定回答
①就活 Information	11.2	22.6	66.3	75.3	20.2	4.4	64.2	24.2	11.6
②キャリアインタビュー	24.4	26.3	49.3	73.3	20.2	6.5	68.6	19.8	11.6
③キャリアシート	55.3	21.9	22.8	63.3	26.0	10.7	76.7	17.4	5.8
④キャリアモデル	46.5	25.6	27.9	58.8	30.9	10.2	59.5	25.3	15.1
⑤企業研究きらり発見	57.4	21.4	21.2	58.6	25.1	16.3	69.3	20.9	9.8
⑥就活インタビュー	34.0	28.8	37.2	67.9	22.8	9.3	78.1	14.7	7.2
⑦キャリア宣言	59.3	18.4	22.3	65.8	23.7	10.5	72.3	18.1	9.5

注）以下の質問の回答で「１．そう思う」「２．ややそう思う」の合計を肯定回答，「４．あまりそう思わない」「５．そう思わない」の合計を否定回答，「３．どちらでもない」「６．実施していない」および無回答の合計を中間回答とした。表の数字は回答数430に占める割合（％）である。
Ｑ１-１　この課題は難しかったですか（難易度）？
Ｑ１-２　この課題の目標を自分なりに達成できたと思いますか（自己評価）？
Ｑ１-３　この課題をやったことは自分の就職活動に役立つと思いますか（効果）？

さらにこのことが自分の就職にどうつながっていくのかという説明が不足していたのかもしれない。調査方法とその有効性のより詳細な説明が必要と考えられる。

５－２　課題レポートの感想

アンケートでは，レポート課題を実施した感想と改善点を自由記入方式で尋ねた。「就職活動で必要なことが課題になっていたからよかった」など，レポート課題だったので実施できた，将来のことを考えるよい機会になったという意見が多数示された。キャリアインタビューを実施したことで「親と就職活動の相談ができるようになった」，就活インタビューがあったので「一度話を聞きたいと思っていた先輩に，思い切って話しができた」という一つのきっかけになったという声も多かった。このほか「就職活動に向けて気合がはいった」「仕事を調べることが楽しかった」など肯定的な感想は多く，課題レポートは一人一人のキャリア意識を高める上で有効だったことが確認できる。

ただし少数ではあるが否定的な意見は存在し，そこから学ぶべきところも多い。ここでは否定的な意見を整理することで，課題の改善点を考えたい。

ひとつは課題の内容にかかわるもので，最後のキャリア宣言に関しては，「自分の意見が固まっていないのに宣言するのは不安だ」「一つに絞るような課題はよくない」と言った意見がいくつか寄せられた。決めるわけでも絞るわけでもないことは，課題説明でも強調したところではあったが，学生にとって「宣言」はかなり重い言葉として受けとめられたようである。課題の名称および説明文は再考する必要があるだろう[6]。また，「企業研究きらり発見とキャリアモデルは同じではないか」との指摘も複数あった。調べる対象が前者は企業であるのに対して，後者は働く人という明確な違いはあるが，この点の理解がうまくいかない面もあったようである。課題間の目的や手法の違いについても解説する必要があるだろう。

体裁にかかわる意見としては「Ａ４限定は厳しい」というものなど，文章の量に関する不満があった。コンパクトにまとめることに慣れていない大学生特有の声であろうが，学生にとって短くまとめることは難しい。ただし，就職活動およびその後の職業生活においてコンパクトにまとめる能力は重要である。500枚ほどのレポートが提出される状況では運営上一枚限定はやむをえないという面もあるが，より重要なのは制約のなかでプレゼンテーションする能力を身につけることである。この点も課題の趣旨として強調する必要があるだろう。

このほか，「講義との関係がわからなかった」との意見には耳を傾けなければならない。毎回のテーマ講義で学ぶこととは別に個別学習としての課題レポートがあり，これらの連携によって効果を発揮するのがこの授業の全体設計である。例えば，自己分析についての講義の日にキャリアシートの課題レポートが出されたり，企業研究きらり発見の日には，企業の方をお招きして人事担当者の視点から企業研究のポイントの話をしてもらったが，明確でなかった回もあったかもしれない。講義内容と個別学習課題の連携について，より明確な結びつきと説明が必要であろう。

最後に，最も多かった否定的な意見は，

表10　課題レポート効果の順位別回答数

	第１位	第２位	合計
①就活 Information	5	21	26
②キャリアインタビュー	35	51	86
③キャリアシート	98	92	190
④キャリアモデル	21	48	69
⑤企業研究きらり発見	50	77	127
⑥就活インタビュー	146	67	213
⑦キャリア宣言	75	74	149

「レポートが多すぎる」というものである。ほぼ二週に一回のペースで出されたことに加えて，最終提出を授業の最終回に設定したため，他の科目の試験と重なった学生も多かったようである。一方で「レポートがあったからこそできた」との意見は多く，7回の課題レポートは自分で学ぶ機会を確保するためには無理ということではないと考える。ただ，最終提出日が試験週間になった問題は考えていかなければならないだろう。提出日を早めに設定することも考えていきたい。

6．おわりに

本論は，大学のキャリア教育を効果的に行うための方法論について，大教室での授業を前提に検討したものであり，山口大学におけるキャリア教育科目の取り組みを検証した。この講義は3年生を主対象とするもので，大教室の弊害を克服するためのいくつかの工夫がなされている。とりわけ個別学習のための課題レポートのパッケージが提供され，提出されたレポートの内容，および学生の評価を見る限り，おおむね教育目標の達成に貢献したものと考える。

今回，大教室で実施する授業のひとつの取り組みとして個別学習課題とテーマ講義を組み合わせた授業展開を検討してきたが，効果的教授法についてはいまだ模索段階でもある。最後に大教室型のキャリア教育科目を実施するにあたっていくつかの留意すべき視点を提示して，本論のまとめとしたい。

ひとつは，キャリア教育は全体への一方的な情報提供にとどまってはならないということであり，自己の気づきを促し，自分から動くことができるように一人一人を育成することが必要である。ただしこの点についての個人差は大きい。キャリア教育科目を受講するまでもなく自分から動く学生もいれば，受講がきっかけとなって動き始める学生もいるだろう。受講しても動けない学生は現実には存在する。キャリア教育のひとつの目標は，受講者全員が今から何をすべきかということに気づき，自分の問題としてキャリアを考えはじめ，かつ，一人一人の個性を輝かせて動きはじめることである。もちろん授業ですべてを実現することはできない。ただ，授業では学内外で展開される就職支援行事などの情報提供ができるほか，少なくても学生たちは講義を通じて講師陣を知ることができる。今回の例で言えば，ジョブカフェ山口のキャリアカウンセラーとの出会いであり，大学スタッフとの出会いがその後の個別相談につながっていく例は数多い。多人数に対して一定の情報をいっせいに伝達できるという意味では大教室のメリットは大きいものがあり，よりいっそう効果を高めるためには授業時間以外の様々なメニューとの連携が求められる。キャリア教育は授業のみで完結するものではなく，正課教育・課外教育を含めて総合的に取り組む視点が重要である[7]。

また，大教室型のキャリア教育において，コーディネーターの役割は重要である。毎回の授業を運営するほか，レポートを通じての学生との対話，課題レポートの説明や進捗管理，質問への回答や提出されたレポートへのコメントなどを丁寧に行うことで，学生一人一人のキャリアを考える力を高めることができる。今回はひとつのかかわりの事例であるが，人数が多いだけにコーディネーターの負荷も大きい。複数クラスを動かす大規模校に関しては，複数のコーディネーターによる運営も考えなければならないだろう。大学スタッフによるキャリア教育の推進力が求められているのである。

大教室であっても少人数クラスであっても，キャリア教育では，多様な学生たちとの個々のかかわりが大切である。一人一人が自分の問題として考えることができるように，授業がその原動力となるべきであろう。そのため

の様々な工夫が求められており，教育法の発展が期待されている。

（学生支援センター　助教授）

引用文献：

社団法人国立大学協会教育・学生委員会「大学におけるキャリア教育のあり方－キャリア教育科目を中心に－」，2005.12.1

平尾元彦［2005a］「キャリア教育の手法としてのキャリアインタビュー」，大学教育（山口大学大学教育機構紀要），Vol.2，2005.3，pp.85-94

平尾元彦［2005b］「キャリア教育の手法としてのキャリアモデル」，大学教育（山口大学大学教育機構紀要），Vol.2，2005.3，pp.95-104

１）本論文での大教室とは，受講者がおおむね100名を超えるような授業を想定している。

２）山口大学の場合，高学年対象の総合科目「就職」および低学年向けの主題別科目「社会と組織：キャリアデザイン」は大教室型を志向しているが，総合科目「キャリア形成とコミュニケーション」は講師との相互作用を重視した少人数（20人）で実施している。

３）大教室の弊害は受講生との双方向性の確保や静寂維持が困難な点，板書が使いにくいなど様々である。もちろんこれは教室の態様や学生気質によって大きく異なるものであり，必ず発生するわけでない。ここでは一般的に発生しうる問題として大教室の弊害をとらえている。

４）前回調査は１年生を主対象とする授業の課題であるが，今回は３年生が主対象であり，回答している学年が異なる。

５）直接会社を訪問するという課題設計も可能であるが，今回は準備段階としてのインターネット等既存資料での調査にとどめた。近隣に会社が多くないという地方大学の状況を考慮すると，現実的な方法と考えている。

６）後期の総合科目「就職」では，同様の趣旨の最終課題を「私のキャリアデザイン」という名称で実施した。

７）この点について山口大学では，授業を実施する専任教員やジョブカフェ山口のキャリアカウンセラーが山口大学就職支援室にて就職相談に対応するほか，卒業生を招いて実施する学内OBOG訪問や人事担当者などをお招きする学内業界・企業研究会をキャリア教育の一環と位置づけて取り組んでいる。また，学生が主体となって企画する就職活動体験報告集「就活Information」や就職活動交流会開催の支援を通じて，正課内外の連携した取り組みを行っている。